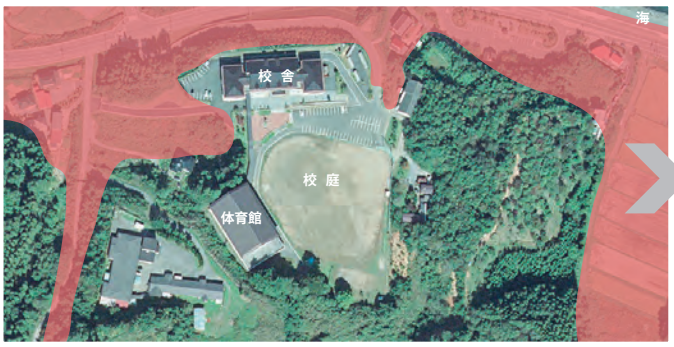
ゼロからのサバイバル①

津波は山から襲って来た ～南三陸町立戸倉中学校～

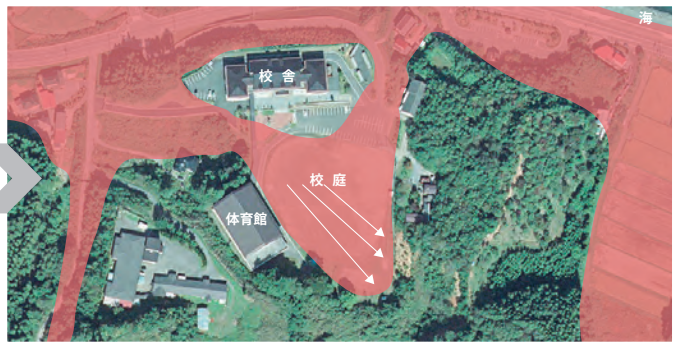
▲戸倉中学校の体育館の天井近くにまで津波は到達した。校庭にいた人々は一目散に山に走り、崖を這い上がったが、その目の前で多くの住民たちが流されて行った。　写真提供　須藤清一

指定避難場所になっていた戸倉中学校は、海抜 20m ほどの高台にあった。激しい本震と続く余震のため、校舎や体育館は落下物や倒壊の危険があると判断し、生徒たちと地域住民は校庭に集まっていた。15 時 25 分が過ぎた頃、戸倉地区に津波が襲来した。津波は海側からだけではなく、校舎の左側の山側からも襲いかかってきた。津波は 22.6m に達し、校舎 1 階と体育館を飲み込み、校舎と体育館をつないでいた渡り廊下は大破した。教職員 1 名、生徒 1 名のほか、多くの地域住民が亡くなった。もしあの日、寒さを避けるために体育館に入っていたら、さらなる大惨事になっていたと住民たちは振り返る。

南三陸町では、この戸倉中学校を含む 78 箇所の指定避難所・避難場所のうち、34 箇所に津波が押し寄せ、多くの住民が犠牲になった。



▲右方向の海側からやって来ると思った津波は左側の体育館の方からも襲いかかってきた。



▲校庭に避難していた地域住民や生徒たちは校庭奥の崖に向かって散り散りに逃げたが…。

ゼロからのサバイバル②

患者さんの命を守れ！ 寒さと暗闇の中で希望をつなぐ ～公立志津川病院～

▲患者たちを５階会議室に運び、必死の看護が夜通し続けられた。

公立志津川病院は９つの診療科、126 病床を有する地域の中核病院だった。４階建ての旧館と５階建ての新館からなり、３、４階が入院病床だった。入院していた患者の多くが高齢で歩行困難だった。

当初の津波予想は６ m だったため、水位が上がっても３階以上にいれば大丈夫と職員たちは考えていたが、津波警報が 10m に引き上げられた直後、志津川地区を高さ約 16m の津波が襲った。ベッドごと入院患者が流されていった。入院患者 109 人のうち 63 人と職員４人が津波の犠牲になり、７人の患者が低体温症・低酸素症で亡くなった。

暗闇と厳しい寒さの中､津波と余震は何度も繰り返した。ずぶ濡れの生存者と避難者の命を守るため、職員たちは「手をつないで」「立ち上がって」と声をかけ続けた。

ゼロからのサバイバル③

みんなどこに行ったんだ…　～旧南三陸町役場 防災対策庁舎～

▲防災対策庁舎の右側にもたれかかる残骸は役場第２庁舎。津波の最大波は非常階段の反対側から襲った。
庁舎の背後にぎっしりと建ち並んでいた住宅や店舗は跡形もなく壊滅した。

1960（昭和 35）年 5 月 24 日、南三陸町は高さ 5.5m のチリ地震津波に襲われ、41 人が犠牲になった。志津川地区の中心部にあった本庁舎が 2.4m 浸水した経験から、南三陸町では、役場庁舎の隣りに鉄骨３階建て 高さ 12m の防災対策庁舎を整備し、2 階に監視モニターや非常通信設備、３階に自家発電設備などを設置し、災害に備えていた。

あの日、危機管理課の職員がここから防災無線で、高台避難を呼びかけ続けた。本震直後の津波警報は高さ 6 m の津波を予想していたが、15 時 14 分、津波予想高は 10m に変更された。この津波予想高を告げた後、防災担当職員始め、町長らも屋上へと避難する。その直後の 15 時 25 分頃、津波が襲来。15 時 33 分には、建物よりはるかに高い、15.5m の津波が庁舎を飲み込んだ。

側壁がはぎ取られ変わり果てた建物が、津波の濁流から姿を現したのは２分ほど経ってからである。非常階段付近とアンテナポール付近に残っていたのはたった 10 人。「みんな、どこにいったんだ」さっきまで屋上にいた人影はなかった。43 人の地域住民と町役場職員たちが犠牲になった。

ゼロからのサバイバル④

327 人の生還　恐怖の一夜を乗り越えて　～高野会館～

▲津波と余震、寒さと恐怖の一夜を過ごした高野会館から脱出し、津波警報が出ている中、自力で高台を目指した。

2011（平成 23）年 3 月 11 日、南三陸町の高齢者たち約 300 人が、海に近い高野会館の 3 階に集まっていた。高野会館は住民に親しまれている催事場で、この日は南三陸町社会福祉協議会が主催する芸能発表会が開かれていた。日頃練習してきた歌や踊りを披露する一連のプログラムが終了し、閉会式を行っているときに地震が襲った。

津波警報の発令に、近所の人たちも津波避難ビルに指定されていた 4 階建ての高野会館に避難して来た。10 人ほどの社協職員と高野会館の職員は、上へ上へと高齢者たちを避難誘導した。屋上に続く防火扉を閉めた時には、最後尾の会館職員は津波に濡れており、まさにぎりぎりの避難だった。屋上の周囲は濁流の海と化した。さらにひたひたと水位は上がり、足元まで浸水した。職員たちは、さらに高いところにある機械室に高齢者たちを避難させようとしたが、そこに続く通路の柵の扉の鍵がかかっており、職員たちはまたいで柵を乗り越え、高齢者を抱き上げて柵を越えさせた。

高野会館に逃げた 327 人は繰り返し押し寄せる津波と余震に怯えながら、一晩中立ったまま夜を乗り越えた。「1 時だぞ。みんな元気がぁ？頑張ってっかぁ？」「生ぎでる？」互いに励まし合う声が、生きる力を呼び覚ました。

翌朝、津波警報が発令されている中、歩くことができる人々は建物を下り、決死の覚悟で高台の避難所に向かった。ここに避難した 327 人は全員生還した。

◀右の建物が津波で全壊した高野会館。
結婚式や会合などで住民に親しまれていた。

写真提供　南三陸町社会福祉協議会

ゼロからのサバイバル⑤

暗闇の集会所で作ったおにぎり 1,000 個

～内陸部の住民たち～

▲内陸に住む住民たちはすぐさま集まり、備蓄の米、井戸水、プロパンガスで避難所に届けるおにぎりを作った。

南三陸町では過去の津波被害の経験から、地域ぐるみで防災訓練を行ってきた。その際に、各地区の集会所で炊き出し訓練を行うこともあった。昔から冠婚葬祭での食事を地域の人々が協働して作ってきた伝統もあり、防災訓練以外にも日頃から地域行事や祭りなどで炊き出しを行う機会は多く、地域住民は大量のおにぎりを協力して手際よく作ることに慣れていた。

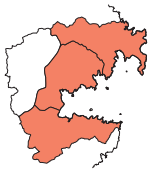
東日本大震災では、地震の激しい揺れと津波警報発令を受け、内陸の住民たちは炊き出しが必要になるといち早く判断した。電気も通信も途絶える中、声を掛け合い、備蓄の食材を持ち寄って集会所に集まり、懐中電灯やろうそくの明かりの中でおにぎりを握り続けた。中には、避難した先で炊き出し作業を行った住民もいる。しかし、予想をはるかに超える大災害に、白米はすぐ底をついた。備蓄の玄米があっても、電力供給が復旧しないために精米ができず、農機具の動力を使うなどして、避難者たちの食をまかない続けた。南三陸町では電気の復旧は 2011（平成 23）年 5 月中旬、水道の復旧は同年 8 月だった。

炊き出し　避難者など多くの人々に食事を作って提供すること

ゼロからのサバイバル⑥

トイレを作れ！

～それぞれの避難所で～



▲まず仮トイレ（右手前）を作った。仮設のトイレ（ブルーシートのトイレ）が完成するのに２日かかった。

写真提供　南三陸町社会福祉協議会

町の 60％の建物が流失し、約１万人もの住民たちが避難者になった。空腹には耐えられても、排便は我慢できない。何よりもトイレの確保を急がなければならなかった。

ベイサイドアリーナや平成の森、小中学校等の大きな避難所の水洗トイレは、すぐに貯水槽の水が切れて使えなくなった。近くに貯水池やプールなどがあるところでは、その水も利用した。しかし、どの避難所も利用者が大勢いたため、野外に仮設トイレを作る必要があった。避難者自ら材料を集め、穴を掘り、囲いを作った。木製の洋式便座を作るところもあれば、漁業用の万丈カゴを伏せて穴をあけ、便座にしたところもあった。浄化槽のマンホールの蓋を外し、流れてきたポータブル便器を拾ってきて、そこに便座を置いて洋式トイレ風にしたところもあった。膝の悪い高齢者や和式トイレを使用したことのない子どもたちが利用しやすくするための工夫である。

地域の集会所が避難所となったところでは、トイレが汲み取り式のところが多く、断水の影響を受けなかった。

いずれの避難所でも、避難していた大工や土木経験者の働きで仮設トイレが作られ、避難住民同士の協力によって維持管理がなされた。

ゼロからのサバイバル⑦

卒業式のはずが…

～南三陸町立志津川中学校～

▲持ち寄られた米や避難した冷凍車の積み荷で、当面の食料を確保した。
側溝にかける金属の網蓋（グレーチング）を利用してかまどを作り、学校の調理器具を借りて、避難者たちの食事を作った。

写真提供　三浦秀一

約 600 人が避難した志津川中学校には、2011（平成 23）年 3 月 12 日の朝、内陸の入谷地区から 300 個のおにぎりが届き、避難者たちは半分ずつ分け合って食べた。

ベイサイドアリーナのある高台に運送会社のトラックが避難していた。水産会社の社長らが声がけして冷凍車の荷物を下ろしてもらい、避難所で分け合うことにした。銀ザケ、サンマ、アワビなどを志津川中学校まで運び、中学生たちも荷運びを手伝った。側溝にかける金属の網蓋（グレーチング）を利用して砂場にかまどを作り、冷凍の魚を焼いて避難者たちの食事にした。車に米を積んで避難して来た人からは米を提供してもらい、おかゆも炊いた。燃料は、みんなが裏山で取ってきた木だった。着の身着のまま逃げて来て、帰る家を失った住民たち。600 人での共同生活の始まりだった。

先生方は体育館の脇に穴を掘って板を渡し、シート囲いの仮設トイレを造ってくれた。先生方のすばやい判断と献身的な協力が住民たちを救った。

本来なら同年 3 月 12 日は、卒業式のはずだった。

ゼロからのサバイバル⑧

一万人の避難者に水を食料を ～災害対策本部～

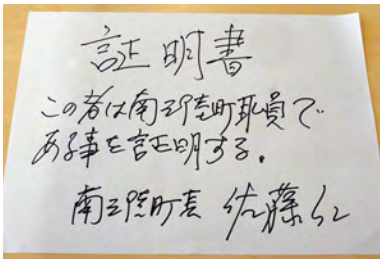
▲毎日定時に開かれた町長の記者会見。メディアの力が多くの人々を南三陸町に呼び込んだ。

災害対策本部が動き出したのは、被災翌日だった。

本部の指揮に当たるべき町長は、津波に襲われた防災対策庁舎の屋上で、かろうじて生き残った９人の職員たちと、ずぶ濡れのまま氷点下の夜を凌いだ。翌朝10人は怪我を負い衰弱した身体に鞭打って、自力で庁舎から脱出。よろめきながら高台の小学校にたどり着いた。一息つく間もなく、町長は高台のベイサイドアリーナに移動し、小さな事務室で災害対策本部を立ち上げた。肉体的にも精神的にも消耗しきっていた町長を突き動かしたのは、町民の命を守らなければという強い思いだけだった。

電話もネットも通じず、ライフラインは途絶し、必要な人や物や情報が何ひとつないという状況で災害対策本部は始動した。最初の会議の参加者は、２人の広域消防職員と町長のたった３人。町長の最初の指示は「情報を集めてくれ」、「住民におにぎりを頼む」だった。夜は、手回し充電の LED ライトを頼りにメモをとった。毛布もなく、寒さに凍えながら床にごろ寝して仮眠する職員の中には、津波で家族や家を失った者もいた。

翌日から、多くの救援者たちが途切れることなく駆けつけた。情報収集もままならない混乱の中、集まった報道陣に、町長は「水を、食料を」と呼びかけた。そして、コピー用紙に手書きした証明書（左下写真）を動ける職員に持たせ、内陸の町での食料や日用品の後払いでの調達を命じた。



▲町長が役場職員に持たせた手書きの証明書。（再現）
内陸部の店の方々が優先的に食料や医薬品などを融通してくれた。

間もなく災害対策本部には、宮城県、地元消防署、警察に加え、緊急消防援助隊、陸上自衛隊西部方面隊、同北部方面隊、国土交通省東北地方整備局、宮城県の職員たちが入り、本格的に災害対応が始まる。

ゼロからのサバイバル⑨

南三陸町についての第一報は3月13日朝刊だった

～河北新報～

死者・不明1700人超

沿岸部壊滅 南三陸1万人不通

東日本大震災

マグニチュード（M）8・8と国内観測史上最大規模を記録した東日本大震災は12日、被害が増え続け、各警察本部のまとめで死者は計635人、行方不明者は645人に上った。宮城県などによると、ほかにも岩沼市と名取市の体育館に計約200人の遺体が運ばれるなどしており、死者・行方不明者は1700人を上回る見通しとなった。

宮城県は12日午後8時、南三陸町で住民約1万人と連絡が取れない状態になっていると発表した。町とともに安否確認を急いでいる。

東北の死者数は各県警のまとめで、岩手257人、宮城178人、福島157人、青森3人、山形1人の計596人。津波で壊滅的な被害が出た沿岸部は被害状況の把握が難航しており、死者・不明者は大幅に増える可能性が高い。宮城県は不明者数を示さず「多数」との表現に切り替えた。

被災地の地元災害対策本部などによると、津波で名取市閖上地区が広範囲にわたって水没。陸前高田市の市街地にはわずかな建物しか残っていない。宮古市と岩手県山田町はほぼ全域が冠水。南相馬市と宮城県女川町の一部は壊滅状態という。

仙台市若林区荒浜の海岸では、津波に巻き込まれたとみられる200～300人の遺体が確認されている。現場は浸水地域にあり、近づけない状態。名取市閖上でも遺体が多数見つかっている。

気仙沼市では、住宅地で大規模な火災が発生した。福島県警によると、須賀川市で藤沢ダムが決壊、4人が死亡、4人が行方不明になっている。

政府は5万人規模の自衛隊員投入を表明、救助や支援に当たっている。

電気、ガス、水道は寸断された状態が続いている。上越、長野新幹線は運転を再開したが、東北、山形、秋田新幹線は復旧のめどが立っていない。

警察庁によると、岩手、宮城、福島など5県で計約21万人が避難。炉心が一部溶融した福島第1原発と冷却機能を喪失した第2原発の周辺住民が避難を始め、避難者は計約30万人に上った。官邸は避難指示を第1原発で半径20キロ以内、第2原発で10キロ以内に拡大、さらに増えるとみられる。

気象庁は、北海道と東北の太平洋沿岸や茨城県、和歌山県、高知県に出していた大津波警報を12日午後から夜にかけて津波警報に切り替えた。大津波警報が出ている地域はなくなった。

おことわり 11日発生した巨大地震は東日本の広範囲で甚大な被害が発生、長野や新潟でも震度6クラスの地震が起きたことから「東日本大震災」と表記します。

▲南三陸町の状況を伝える河北新報の第一報　2011（平成23）年3月13日

河北新報朝刊　　記事提供　河北新報社

「南三陸1万人不通」という衝撃的な見出しが朝刊の一面で報じられたのは、震災から2日が過ぎようとする2011（平成23）年3月13日だった。当時の南三陸町の人口は17,666人。住民の半数以上と連絡が取れなくなっている状況であることが全国に報じられた。

町の人たちは果たして生きているのか。この報道は、この町とつながりのある人たちにとって、被害の厳しさ大きさを想像させるものとなった。

その後も、生存者の状況や町の被害などを把握することが難しい状況が何日も続いた。ニュース映像に偶然映ったことで、初めて知人が無事でいることを知ったという人も多かった。